

## 本学教育研究にみる新たな動向

羽入佐和子 学術・情報機構長 副学長

伝統ある高度な教養教育と、先端的融合的な専門的研究とが、本学の教育研究の特色をなしています。

教育面では、平成17年度、「魅力ある大学院教育イニシアティブ」という大学院教育の重点的プログラムとして次の二つのプログラムが採択されました。

人文社会系：「＜対話と深化＞の次世代女性リーダーの育成」

理工農系：「生命情報学を使いこなせる女性人材の育成」

どちらも女性の新しい活動分野を開拓する教育プログラムです。文系と理系の両分野を有する本学の大学院教育の成果は高く評価され、今後の取組にも多くの期待が寄せられています。

研究の面では二つの21世紀COEプログラム、「誕生から死までの発達社会科学（14年度採択）」と、「ジェンダー研究のフロンティア（15年度採択）」が進行中です。この他に、教員養成GP「サイエンスコミュニケーション能力養成プログラム」（17年度）

が採択され、教育指導者の養成にも力を入れています。

さらに4月からは次の3つのプログラムが新たに始まります。

「女性リーダー育成プログラム」

「コミュニケーション・システムの開発によるリスク社会への対応」

「幼・保の発達を見通したカリキュラム開発」

これらの活動に伴い、学内では日常的に多くの講演会やシンポジウムが開催されており、本年5月にはノーベル物理学賞受賞者（1991年）P.G.ドジャンヌ教授を招いての講演会も予定しています。

このように教育と研究の両面で常に最先端を目指している本学の動向は、大学HPに随時掲載しておりますのでご覧ください。

<http://www.ocha.ac.jp/>

## 生活科学部本館の改修工事終了

昨年7月から行われていた生活科学部本館の改修工事（第11期）が今年2月末に終了しました。これで徽音堂（大学講堂）を除く本館の改修が完了しました。建物1階及び2階の前面には、学長室・理事室をはじ

め大学事務局が置かれ、1階及び2階の左右の翼と3階は、生活科学部の講義室・実習室や研究室が配置されています。

多くの国立大学法人の中でも、生活科学部本館のように戦前の建物（1932年竣工）を保存活用しているケースは例外的で、建築の専門家からは高い評価を受けています。また徽音堂の改修も決定し、本年5月着工、9月末には竣工の予定です。この間徽音堂は使用できなくなります。しかし、10月のオープンキャンパスや11月の徽音祭（大学祭）は、化粧直しされた徽音堂で開催されることとなります。

（文責：編集委員会）



改修の際、保存された大理石の暖炉（歴史資料館・旧洋式作法室）

## 国際会議「人道支援における心のケアーカウンセリングと国際支援」

本学の開発途上国女子教育協力センターでは、過去3年間のアフガニスタン女性教育支援の実績を踏まえ、「開発途上国（紛争地）における女性の心のケアの支援」新プロジェクトを立ち上げました。

2月11日、その一環として、人道支援での心理的ケアの重要性、カウンセリングと国際支援のコラボレーションを考える国際会議（後援：5女子大学コンソーシアム、国連人口基金東京事務所、独立行政法人国際協力機構）が本学において開催されました。

酒井啓子氏（東京外国語大学大学院教授）とヘニア・ダック氏（国連人口基金）の講演後、お二人にアン・ブロッスキ氏（メリーランド大学助教授）、柴田裕子氏（NPOピースウィンズ・ジャパン）を加え、河野貴代美本学客員教授（日本フェミニスト・カウンセリング学会理事長）の司会で、シンポジウムが行われました。国際支援における心理的ケアという、学術

と実践を融合させた新しい試みに対して、活発な論議が行われました。（文責：編集委員会）



国際会議「人道支援における心のケア」のシンポジウム

## 17年度公開講座「子育てのための身近なリスク管理論」

18年1～2月にかけて、子供を育てている、あるいは将来育てるであろう女性を主な対象として、ライフサイクルのさまざまな段階におけるリスクについて、それを回避、克服することを目的にした公開講座が、5回連続で実施されました。全回本学教員が担当し、牧野カツコお茶の水女子大学附属幼稚園長・人間文化研究科教授をトップバッターに、坂元章氏、大森美香氏、耳塚寛明氏、大森正博の各氏が、発達心理、教育学、福祉論など幅広い研究領域から話され、総数約250人の参加がありました。

（文責：編集委員会）

